

私を感動させた1冊

「彩志義塾」代表理事古川裕倫さん

「カモメになったペンギン」

ジョン・P・コッター 他著



ビジネス現場での女性活躍推進を担う一般社団法人「彩志義塾」(東京・南青山)代表理事で、経営コンサルタントの古川裕倫(ひろのり)さん(64)が推す1冊は、J・P・コッター他著『カモメになったペンギン』(藤原和博訳・ダイヤモンド社)だ。

ビジネスをペンギンにたとえ、カモメを改革実現の象徴とした題名は邦題

で、原題は「とげかかった水山」。水山はペンギンの住み家であり、その住み家が脅(おびや)かされるのは、ビジネスマンの所属する組織(会社)が存続の危機に陥る状況を表す。



らの人々への評価が低く、信賞必罰であるべきなのに年功序列が根を張っている。徹底した評価を行うグローバル企業との差が生じている」と指摘する。古川さんの話と本書の内容とは符合する点が多い。

本書はペンギン社会のある若者が水山の気候による変貌に気づくところから物語が始まる。当初、集団の大半は、若者の問題提起に理解があったとは言いがたい。が、若者の意見に賛同する女性ペンギンが登場し、徐々に集団の空気が変わっていく。

古川さんは印象的な場面を「『ノーノーペンギン』の存在です。どこの会社組織でも改革に反対する勢力があるのです」と、自身の体験を重ねながら、改革には抵抗がつき物と語る。

昔、新橋・横濱間に鉄道が開設される時、猛反対があった。国内の鉄道が街の真ん中を通っていないのはその名残です」

改革の敵は保守意識

の敵は身内に巢食う強烈な保守意識

「かかつては『V字回復の経営』などの指南書があったが、今はあまりない。『改革』がテーマの本がなにかとネットで探して、本書に出合った」という。古川さんが現在、メインにする仕事が「企業の風土改革、コンサルティング、外国人や女性や障害者の雇

「読むきっかけを古川さんは「かかつては『V字回復の経営』などの指南書があったが、今はあまりない。『改革』がテーマの本がなにかとネットで探して、本書に出合った」という。

古川さんが現在、メインにする仕事が「企業の風土改革、コンサルティング、

外国人や女性や障害者の雇

用は見られるも、本質は変わらぬ。依然としてそれを「『ノーノーペンギン』

の存在です。どこの会社組織でも改革に反対する勢力があるのです」と、自身の体験を重ねながら、改革には抵抗がつき物と語る。

昔、新橋・横濱間に鉄道が開設される時、猛反対があった。国内の鉄道が街の真ん中を通っていないのはその名残です」